



MEKUI SAKANA
no
BLUE GOOD-BYE

夢食い魚の
ブルー!グツドバイ



玉岡かおる



新潮社

夢食い魚の
ブルー!グッ



ゆめく ぎかな
夢食い魚のブルー・グッドバイ

たまおか
玉岡かおる

発行——1989年 6 月10日

5 刷——1989年 9 月10日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162東京都新宿区矢来町71■振替・東京4-808

電話——業務部03-266-5111

編集部03-266-5411

印刷所——株式会社光邦

製本所——大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Kaoru Tamaoka 1989, Printed in Japan

ISBN4-10-373701-8 C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

夢食い魚のブルー・グッドバイ

装帧●邊見由実子

私の部屋には、一匹の魚が住んでいる。思い出した時しか餌をやらないが、腐蝕した水の中で、魚は一年近くも生き続けている。

やたら腹の大きな魚だった。その腹には何十万という卵が詰まっていて、夏までにも産みおとしてしまうのかと思っていた。

だが、冬が去ろうとしている今も、魚の腹は依然として大きいままだった。

ベッドに転がって耳を枕に押しつけると、ドアの横に置いた大きな水槽がちょうど私の正面にくる。緑色に曇ったガラスに囲まれた小さな世界を魚はもうすっかり知りつくしていて、初めの頃のようにガラスにつきあたってからあわててヒレをばたつかせたり、もがくようにガラスの前面を上下したりすることはなくなっていた。ゆう、と泳いできて、ガラスの手前でしなやかに身を返す。瞬間、ギャングの名にふさわしく、むき出した目玉と出張った下顎の、いかにも貪欲そう

な顔が大映しになった。

2

大物を釣ったぞ、とヤマトが電話してきたのは、ちょっと気の早い半袖のブラウスを着てみた五月の午後だった。受話器のむこうで、走りすぎる車の音がずいぶんうるさかった。

「え？ 何て言ったの？」

き・こ・え・な・い。一つずつ切った音を、私はいらだたく投げつけた。

「俺、いまカモ池に来てるわけ」

弁解するようなヤマトの声は、私を懐柔する優しさを帯びていた。それは、つまらないことでさからいあつてケンカ別れしてしまつてから、互いを意識して過ごした数日を埋めあわせようとする、作為的な優しさだった。

「オオモノ。わかる？——でっかい魚を釣ったんや」

今度はしっかり聞こえた。ちよつと興奮ぎみの、誇らしげな声。

しかし私は「ふうん」としか答えなかった。

数日前の、ケンカのあと味の苦さがまだ胸にあった。確かスカイラインにディーゼル車がある

かないか、というようなことが原因だったと思う。

「こういう時は女の方が謝るもんや」などと時代錯誤な思い上がりを押しつけられれば、徹底的にさからいたくなるのが私なのだ。

私は電話のこちら側で、まだ心をとがらせたまま黙っていた。

「お。――その声は、信じてないな」

あたり前だ。そんな子供だましのテにのって、即、機嫌のいい声が出せるほど単純にはできたらん。

「まあ見て驚くな。今から行くから、心の準備して待つとけよ」

私に気のりのしない返事しかさせないうちに、勝手に電話を切った。

何だよ、それは。急に恨みがましい気分になって、すでに切れている電話に向かってほえてみた。

悪かったと思ったなら、素直にそう言えばいいのに。優しく出られたら、てもなく転んでしまう自分の中の女を、私はよく知っている。逆に剛で出られたらこちらも剛で返すしかない。

私は階段を上りかけてふり返り、のび上がって玄関の沓脱ぎを見た。私のサンダルがそろえられている。母は店へ行ったらしい。私は階段の柱に取り付けられた玄関チャイムのポリウムをMAXにしてから部屋へもどった。

あんな奴をのんびり待つて暇はない。来週からは中学校の教育実習が始まるし、それまでに卒論のためのレジュメ提出が待っている。大学卒業年次というのに、まだ魚釣りに夢中になって

いるような男にかまつてなどいられないのだ。

ヤマトときたら、卒論のない法学部にいるうえ、必要単位数がやたらと多い教職課程も、初めからギブアップしている。だから四回生になったといつてもたいした緊張感もなく、今までどおり授業にも出ないで車を乗りまわしているわけなのだ。釣りを始めたのも無目的に走りまわることに飽きてしまったからで、おふくろさんに「どこへ行くの」と言われたときにいろいろ答えを考えるのが面倒になったからでもあった。物置きから子供のころ使っていた釣り竿をみつけてきてからは、どこへ行くにも「釣りに行ってくる」と言ってきたようなうだった。

私とヤマトが住んでいる播州平野のこのまちは、一帯が古くからの水田地帯で、いたるところに溜め池があった。彼がぶらりと車を出せば、必ずそういう池に行きつく。あんなところに未知の池があった、あそこの池では釣れなかった、などと冒険家気どりだ。そして、今まで通りすぎただけだった池でこんなに長く楽しめるなんて、と、本人はえらく凝り始めた。

だが私のほうは迷惑もいところだった。

「天気もええぞ。むこうの山がきれいや」

呑気なヤマトの声は、母に言われていた用事や、翌日提出しなければならぬレポートも放擲^{ほうてき}させ、うきうきと差し入れのおにぎりを作らされるほどの説得力を持っていた。

けれど、いつでも、彼のピクは空っぽだった。

「ごつつい手応えやったぞ。八十センチはあったやろな。ちょっと引きが早かったかなあ」

ヤマトの妄想の中で拡大されたバケモノ級の魚は、その池にいったい何匹いることか。そんな

大物を「もう少しのところ」で逃がしてしまった彼の残念物語を、私はうんざりするほど聞かされていた。池のそばの木の枝に釣り針をひっかけてしまい、木登りで終わった日もあった。ぽかぽか暖かい午後、眠そうな顔をした亀を釣りあげたこともある。亀も驚いたのか、宙づりになりながら、短い手足をジタバタさせていた。釣れないのは餌が悪いんじゃないかと言いだして、私が差し入れた自慢の卵焼きを針につけたこともある。

「桜子もやってみたらええねん、おもしろいで」

退屈そうにしている私に、ヤマトは媚びるように笑う。

あほらし。金魚すくいのほうが似合ってんじゃないの。——さんさんに憎まれ口をたたきながらもついでにってしまう私ぐらいしか、ヤマトに釣れるものなんてないだろう。

レポート用紙を前に、一行も書けないでいるうちに、ヤマトの車が家の前に停まった。溝に敷いてある鉄板を鳴らすタイヤの音、ターボ車特有のエンジンの音、停まった後で必ず一度アクセルをふかす音。座っている私も私にはわかつてしまう。きつとドアを開けたままごそごそやつてるんだろう。でも私は彼がちゃんと玄関のベルを押すまで、机の前に座ってがまんしていた。

MAXにしておいたチャイムが家じゅうに響きわたるのを聞き終えたと、私はわざとぐずぐず玄関に向かった。ほそとつとつ立っている彼は、まっ黒なレンズの、へんてこなサングラスをかけている。そして口元だけにんまり笑って、右手でVサインをしてみせた。

その無邪気さにつられてはいけない。まったく、私は彼のその笑顔に、弱いのだった。

白いTシャツに、リーバイスのストレート、それにゴム草履。一見さりげない格好だけど、べ

ルトに通したウエストポーチや、ウェィアウトのプリントで、実は彼がおしゃれに苦心していることがわかってしまう。

私は何も言わないで、彼が左手に持ったポリ容器をのぞいた。それは餌に使う養殖ミミズのケースで、葡萄なら一房入りそうな大きさだった。その中に、魚はいた。

無言を守っている、といった風情で、魚はじつとしてゐる。エラブタを膨ませたり閉じたりしているほかは、いかめしいぎざぎざの背びれを立てて、身を固くしている。

私は思わず息をのんだ。水底から別世界へ連れられてきたその生き物のかたちが、とてつもなく精巧につくられていたからだった。

ふいに、初めて彼が小ブナを釣った日のことを思いだした。

「落ちついて、落ちついて。桜子、さわぐんじやないよ」

騒いでゐるのは自分だということに気づかないほど興奮して、ヤマトはリールを巻きとつていた。糸が水を切つてぴんとはねる。

「わっ！」

及び腰の彼が捧げ持った竿の先に、人さし指ほどの小ブナが、薄っぺらな身を裏返したりねじつたりして、必死の抵抗をしていた。

だが、彼は初めてのその獲物を、針からははずせない。

「わっ、血が出た」「こいつ、目エつぶつてくれへんか」

騒ぎながら、新聞紙で魚をつかんでいたが、口に刺さった針はさんざんに魚を傷つけていた。

ついに、針をはずさずに糸を切った。そのまま水へ逃がされた魚は、またたくうちに去ってしまった。

きつと死ぬまで、あの釣り針を口につき刺したまま泳ぎ続けるのだろう。——いやな後味だった。

けれどもヤマトはこりずにまた新しい針をつける。ふしぎなもので、一度釣れると、次からはおもしろいように釣れた。もう初めの時のような騒ぎはない。しかし、針をはずせないのは今度も同じだった。彼は近くで釣りをしていた少年に応援をたのんだ。

どこの池にも、タイガースの帽子をかぶって、二、三人で釣りをしている少年たちがいる。どの少年も、ときどき、互いのようすをたずねあうほかはおそろしく寡黙で、目深にかぶった帽子の下が目が、真剣に竿先をみつめている。

「ちよつと、こいつ、はずしてくれへんか」

ヤマトに声をかけられた少年は、まだ小学生だった。どこか軽蔑したような顔で、無言のうちに手際よく魚をはずした。

「君ら、よくここへ来るんか？」

少年は、答えない。

「ここ、よう釣れるんか？」

またまたヤマト。それはずいぶん柔らかい尋ね方だったが、少年は警戒心をあらわにして、何も答えなかった。

無理もない、と私は思った。こんな昼日なか、子供と同じようにぶらぶら釣りなんかしている彼を、きつとうさんくさいオジサンだとも思ってるんだらう。

「どんなサカナ釣つとんねん。——いっぺん、見てやろ」

ヤマトは、私への体裁をとりつくろうためか、えらく尊大な足どりで少年のビクをのぞきに行つた。しゃがみこんで池につけられたビクを引きあげると、そこにはまっ黒な、武装した戦士のようにもものしい魚が、ぬらりと鱗を光らせていた。

「すげえ。——こいつ、なんていうサカナ？」

彼の声は、心から驚嘆しているようだった。

少年は自分の竿先だけに気を配りながら、無表情な顔をヤマトにむけた。

「ブラック・バス」

それが彼の、ブラック・バスとの出会いだった。「ようし、俺もこいつを釣るぞ」彼ははなばなしく、大物狙いを宣言したのだった。

釣り具屋に貼られた魚拓で見るしか、ヤマトには縁のない魚だった。くろぐろとした墨のうろこには、まだ息をしている魚の生命感がある。紙の上の魚のかたちは、ヤマトの頭の中でむつくりと立体感を帯びて泳ぎまわった。糸を垂れて、静かな池のおもてを眺めながら、はるか水底で、あの巨大な魚たちが呼吸している姿を想像する。それはもう、ぞくぞくするようなロマンなのだと、ヤマトは夢中になって話していた。

その魚が、ここにいる。

私は急に我に返つたように物置きへ走つていき、バケツを用意した。庭先の水道から水を汲んでくると、ヤマトは玄關の置き石に腰かけて、まるで監督みたいにえらそうに言った。

「あかん、あかん。二日ほど陽に当てた水でない」と

うちの水道は二日前の水など出ない。言い返そうと思つていたら、

「こんな小さいバケツしかないんか」

なかなか注文が多い。自分の釣りあげたのは、とたんに「お魚さま」に格上げになるんだから始末が悪い。

初夏の陽がまだ高く、少しも夕刻を感じさせない。

バケツを囲むようにのぞきこんでいるふたりに、いつか「ごめん」の言葉なしに、なごんだ空気がおりにいた。

その時、突然魚が全身で跳ねて、バケツからとび出した。私はきやつ、と叫んで後ずさり、バランスをくずして尻もちをついた。

魚は、すっかり濡れた地面の上で、じつと横たわっている。

「死んだふり、しとるんかな」

ヤマトはバケツからティッシュをとりますと、もぞもぞと近づいていつて、おそろおそろに魚をつかんだ。私のいぶかしげな目と合うと、

「じかにつかんだら、手がなま臭くなるやろ」

と弁解した。魚はもとのように狭いバケツの中に、ふてぶてしく潜んだ。

へんな、さかな。身のほども知らずバケツから脱走したりして。

けれど、逃げられるなどと思つてとび跳ね、外界へ出ようとしたこの魚が、私は妙に氣に入つてしまつた。

「ねえ、このサカナ、どうすんの」

さぐるようにたずねると、ヤマトは姿勢を正しながら、

「もちろん、逃がしてやるんやんか」

野にあるものは野に置くのがいちばん、などと、博愛主義者の顔になつた。實際、陽が傾いて帰り仕度を始めるとき、ヤマトはビクの中に釣りあげた魚は、みな放してやるようだ。彼はそれを、とても英雄的な行為だと思つていて、私に対してちよつぱり誇らしげな顔をする。それならはじめからそつとしておいてやればいいのと言いたいところだが、私がやりこめると彼は、

「うるさいなあ」「俺の勝手でしょ」

反論できずにふくれてしまうので、またまた本格的な口論になつてしまう。

私がなんとか言葉をもみこんだのは、この魚がほしくなつてしまつたからだつた。

今までのいきがかり上からいって、この魚は、半分は私の協力で釣れたようなものだ。

めずらしく大学へ行くので、乗せていってやろうなどとうまい誘ひにのせられたばかりに、落とした授業の出席数は片手でない。授業後の待ち合わせが釣り具屋の物色になり、「桜子、すまん、金、かしてくれ」と泣きつかれてにわかサラ金に早がわりしたことだつて数えきれない。だが、当然という顔をしてはいけない。モノをねだる時にはそれなりの手順が、あるものだ。

「せっかくの大物なのに……」

大物、という言葉にヤマトの顔がゆるむ。おだてられてると気づいてないのが彼らしい。私は一世一代の笑顔を作つて言つた。

「記念に飼つてみない？ 私、大事に面倒みてあげるわよ」

アホか、と彼はつぶやいた。

こういう時は、下手に下手に、くすぐるようにたのんでみるのがコツというものだ。ふだんは軽蔑している女の媚びも、このさいそんなこと言つてはいられない。——なにしろヤマトは、たのみごとを二つ返事でひきうける、ということがないのだから。いつも四、五分はぐずつて、もつたいをつけ、そしていつばい条件をつけてやつと商談成立というあんばいだ。しかもその後、恩に着せることはなはだしい。

私はねばりにねばつた。ついにヤマトは、

「こいつを飼うなんて、難しいぞ」

銚先をおさめてきた。

「うん、うん」

私は尻尾があつたら振り回したいような気分で答えていた。

「大きい水槽が、いるなあ」

ついに敵は陥落した。そうして魚は、私のもとに残されることになった。

夏と呼ぶにはまだ早い、微妙に季節が動きだしたような夕暮れのことだった。バケツのそばに

かがみこんだふたりの影法師が、長くのびていた。

3

ブラック・バス。

播州平野では、たいていどこの池にもいるということだったが、魚といえばコイやフナしか知らなかった私には、こんな横文字の名前の魚が、身近に、しかもあまねくすみついているということが驚きだった。

サカナへんの名でないのは、どうやら外国の魚だということらしい。海ならば話はわかるが、こんな内陸の小さな池に、魚はどうやってやってきたのだろうか。

池のほとりの釣り少年は、そんなこともよく知っていた。

「昔、釣りキチのおっちゃんが、アメリカから帰って放したんや」

輸入されたブラック・バスは、古くから日本に棲息している野鯉やフナを食い荒らし、驚くべき生命力と適応性で繁殖していったらしい。少年は擬餌針を糸先につける作業をやめないで話してくれた。

それにしても、放流された池は限られていたはずなのに、魚はどうやって、他のあらゆる池に